

『古今和歌集』『新古今和歌集』に現れる建築と環境の
関係に関する研究THE RELATION OF ARCHITECTURE AND ENVIRONMENT
IN THE JAPANESE POEMS "KOKINWAKASYU"
AND "SHINKOKINWAKASYU"

張 奕文*, 中川景子**, 若山 滋***

Yiwen ZHANG, Keiko NAKAGAWA and Shigeru WAKAYAMA

The present paper investigates the relation between the stylistic nature of architecture and environment in the Japanese poems "KOKINWAKASYU" and "SHINKOKINWAKASYU" written during Japan's Manyo Dynasty 849-1205. After analyzing the type of wording and the context of poem, we propose that the aesthetic consciousness of architectural space in Japan's Manyo Dynasty is changed from the frank disposition of "MANYOSHU" by using "sky" "sun", to the beauty of "KACHOUFUGETSU" of "KOKINWAKASYU" by using "bird" "autumn" and mutable idea of "MONONOAWARE" of "SHINKOKINWAKASYU" by using "moon" "wind".

Keywords: architecture, environment, literature, aesthetic consciousness

建築, 環境, 文学, 美意識

1. 研究の意義と目的

『古今和歌集』『新古今和歌集』（以下『古今集』『新古今集』と略記する）は、日本の中・古代、平安王朝から鎌倉初期にかけての代表的な勅撰和歌集であり、そこに、いわゆる国風文化の時代意識ばかりでなく、日本文化の伝統における支配的な「空間の情緒性」が表現されているものと思われる。

文学の中に登場する建築や、建築と環境との関係について研究することの意義については、既発表論文^{註1)}で述べているが、本論の目的は『古今集』『新古今集』における建築用語^{註2)}を含む歌の中に登場する音、熱、光など環境工学的な意味の環境に関する用語を全て抽出し、その意味と文脈を類型化し、歌に表現された情感を考察する。また、既に発表されている「『古今和歌集』と『新古今和歌集』における建築空間」^{文9)}、「『万葉集』に現れる建築と環境の関係に関する研究」^{文12)}と合わ

せ、万葉・古今・新古今と続く歌集に現れる建築空間と環境との関係を考察することによって、古代から中世にかけての日本文化における空間情緒の変遷を探ることを目的とする。

2. 研究対象

『古今集』は全20巻、最初の勅撰集であり、その時代は第一期（読み人知らずの時代）・嘉祥2年（849年）頃まで、第二期（六歌仙時代）・嘉祥3年（850年）から寛平2年（890年）まで、第三期（撰者時代）・寛平3年（891年）頃以後と分けられる。成立は905年とされるが、それは菅原道真が遣唐使を廃止して10年ほど後であり、それまでの唐文化の影響の強い文化から一転して100年ほど後の『枕草子』や『源氏物語』に至る、いわゆる国風文化の時代の出発点となるものである。

『新古今集』は全20巻、八番目の勅撰集であり、

* ㈱青島設計 工博

** ㈱河合松永建築事務所 工修

*** 名古屋工業大学社会開発工学科 教授・工博

Aoshima Architects & Engineers Inc., Dr. Eng.

Kawai Matsunaga Architects & Engineers Inc., M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

1205年の成立とされる。この時代は平安末期から鎌倉初期の、政治的には血生臭い抗争の時代であったが、この歌集は平安時代への思慕の心を多く含んだ古代王朝的なものが主である。

本研究における用語の抽出は、新潮日本古典集成『古今和歌集』^{文1)}『新古今和歌集』^{文3)}により、それぞれ『古今集』1100首と『新古今集』1979首から行う。

3. 既往の研究

日本の古典文学に登場する都市や建築空間に関する研究^{註3)}としては、木村徳国氏^{註4)}、池浩三氏^{註5)}、小野恭平氏^{註6)}及び中小路駿逸氏^{註7)}の研究が注目すべきものである。また筆者らは、「『万葉集』における建築空間」^{文8)}、「『古今和歌集』『新古今和歌集』における建築空間」^{文9)}、「『源氏物語』における建築空間」^{文10)}と「『枕草子』における建築空間」^{文11)}などの論文の中で、そこに登場する建築用語を全て抽出することを基本に、その用語が示す空間の性質、文脈との関係、作者の空間評価、文学の空間構造などについて研究を続けている。また以上の研究をまとめたものとして、「文学の中の都市と建築」^{文13)}と「『家』と『やど』」^{文14)}が出版されている。また文学の中の建築と環境との関係については、「『万葉集』に現れる建築と環境の関係に関する研究」^{文12)}がある。本研究では、「万葉集」から『古今集』『新古今集』にかけての建築空間と環境との関係を考察することにより、その情緒的意味構造の変遷を探るという立場をとっている。

4. 研究方法

4-1. 『古今集』『新古今集』の中から、建築用語を含む

表1 『古今和歌集』における頻度の高い環境用語

分類	環境用語	頻度	分類	環境用語	頻度	分類	環境用語	頻度
光 (33)	夜	8	音 (27)	時鳥	8	自然 (76)	雪	6
	雲	5		声	5		時雨	5
	朝	5		音	4		霜	5
	霞	3		まつ虫	2		露	4
	天	3		鶯	2		霞	3
	夕	3		雁	2		雨	2
	空	2		秋	13		霞	3
	蚊遣火	1		春	6		天	3
熱 (1)			季節 (25)	冬	4	空気 (55)	空	2
				夏	2		風	2
匂 (3)	香	3						

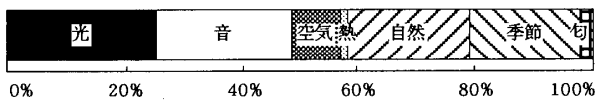


図1 『古今和歌集』における環境用語の分類構成比

歌について、人間の視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚という五感を基準とする感覚に関連する環境要素を指す語を環境用語と定義して抽出する。歌の意味内容を考慮し、[光] [音] [熱] [空気] [自然] [季節] [匂] に分類して集計する^{註8)}。

以下に、その分類と用語例を示す。

- a : 光 視覚で明暗を判別できるもの、日、月、気象現象、火炎 (日、天、火、夜、月等)
- b : 音 聴覚で認識できるもの、人と動物の声、自然界の音 (音、うぐひす、言、ほととぎす等)
- c : 熱 体に熱感を与えるもの (火、氷凝り等)
- d : 空気 空気を媒体として環境認識をもたらすもの (風、霞、霧、天、あらし等)
- e : 自然 視覚、聴覚、触覚で認識する自然界の現象 (雨、雪、あらし、露、霧等)
- f : 季節 視覚、聴覚、触覚に時間的要素を加えたものである。旧暦に従って、一~三月を春、四~六月を夏、七~九月を秋、十~十二月を冬とする
- g : 匂 嗅覚により認識できるもの (香り等)

味覚に関しては対象となる歌中でこれに関する用語が見受けられなかったため、本研究の対象とならなかった。

4-2. 抽出した環境用語について建築用語との関係を考察

表2 『新古今和歌集』における頻度の高い環境用語

分類	環境用語	頻度	分類	環境用語	頻度	分類	環境用語	頻度
光 (179)	月	48	音 (56)	音	14	自然 (76)	露	21
	影	22		鐘	7		雪	17
	夜	18		声	7		時雨	15
	夕	18		あらし	6		霜	10
	雲	12		時鳥	5		あらし	6
	暮	10		雁	3		雨	5
	空	7		うづら	2		五月雨	2
	けぶり	6		言	2		氷	2
	天	6		鹿	2		霧	2
	日	6		波	2		夕立	2
	明け方	4		秋	29		風	40
	有明	4		春	14		空	7
	あかつき	3		夏	4		天	6
	宵	3		冬	2		あらし	6
火	2	匂	2	霧	2			
星	2	花	1	熱	けぶり	6		
朝	2	香	1	氷	2			

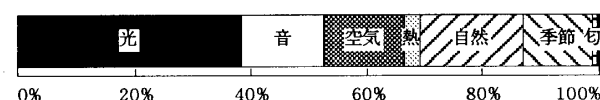


図2 『新古今和歌集』における環境用語の分類構成比

し、それぞれの修飾用語を抽出して建築及びその環境に対する人間の情感を考察する。また、建築空間及びその環境に対する歌の情感表現を、文脈、歌の作者、その時代背景を踏まえて考察する。

5. 環境用語の抽出

『古今集』『新古今集』において抽出された環境用語の内、頻度の高い用語およびその分類構成を表1と図1、表2と図2に示す。建築用語に含まれる歌を対象とし、その中に登場した環境用語は『古今集』が131語、『新古今集』が429語である。全体から見ると、『古今集』には[光][音][自然][季節]が多く、『新古今集』では[光]が圧倒的に多く、次いで[自然][音][空気]が多く登場する。特徴的な語彙は、『古今集』では「夜」「時鳥」「秋」「雪」「春」、『新古今集』では「月」「秋」「露」「夜」「雪」「春」「音」「風」である。

5-1. [光]について

[光]に関する用語は『古今集』33語で環境用語全体の25%、『新古今集』156語で環境用語全体の39%を占め、頻度が一番高い。『万葉集』でも[光]が圧倒的に多かったが、「天」「日」など太陽に関する用語がその中心だったのに対し、『古今集』では「夜」、『新古今集』では「月」など、太陽から月の光に移行する傾向が注目される。また、太陽に関する光の表現でも、『万葉集』の直射光的なものに対して『古今集』では「朝」「夕」などの柔らかい間接光的な表現が、特徴的である。

5-2. [音]について

[音]に関する用語は『古今集』31語で環境用語全体の24%、『新古今集』62語で環境用語全体の15%である。[音]に関する用語は、「音」「時鳥」など、人間の言葉から動物及び自然現象まで様々なものがある。中でも鳥の鳴き声は多く、古今から新古今までの時代の人々の自然風景に対する感情、特に「花鳥」に対する耽美の情緒がうかがえる。

5-3. [空気]について

[空気]に関する用語は『古今集』11語、『新古今集』55語であり、その中のほとんどは「風」「天」である。『古今集』では、[空気]に関する用語は少ないが、『新古今集』には、「風」「松風」「あらし」「神風」「秋風」「夕風」「山風」「上風」「春風」など多様な表現が登場し、風に関する関心の深さを伺わせる。

『新古今集』の時代になって、王朝文化の空間における「花鳥風月」の情感が一般化され、「あわれ」の美意識に結びついて様式化されていることを示す。

5-4. [熱]について

[熱]に関する用語は『古今集』1語、『新古今集』

10語である。『新古今集』においては、「けぶり」「夕煙」など煙を示す語が多く、外の情景を表すのに用いられる。

5-5. [自然]について

[自然]に関する用語は『古今集』27語で21%、『新古今集』75語で18%を占めている。「雪」は景色としてよく登場している。「雨」など降雨に関するものは少なくなっていることは、「天」「日」が少なくなっているのと同様、詠み人の生活の農耕生活から都市生活への移行と関連していると考えられる。これに対して、「庭」という身近な空間内にある「露」「霜」はよく現れている。

5-6. [季節]について

[季節]に関する用語は『古今集』25語で、『新古今集』49語である。両歌集とも、万葉時代の歌と同様に「秋」と「春」を詠む歌が多い。全体的に見ると、「春」への新生の希望よりも「秋」への憂いを歌うものが多い。

5-7. [匂]について

[匂]に関する表現は『古今集』になって初めて見受けられるようになったが、それでも頻度としては『古今集』の「香」1語、『新古今集』の4語と少数である。

6. 建築用語と環境用語の関連

6-1. 『古今和歌集』

図3に示すように、『古今集』における「やど」では[音]の比率が高く、次いで[季節][光][自然]と続く。用語としては「時鳥」「夜」が多い。「時鳥」は夏の到来を表す鳥として使われており、鳥の鳴き声や夜光によって自然を愛でることを表している。また「秋」は孤独、寂しさなどを想起させる。他に「声」「雪」「風」も多い。登場する環境用語は「やど」の周辺に関するものが多く、寂漠とした情緒を引き出している。

「垣」では「季節」の比率が半分近くを占め、ついで「光」「音」と続く。「垣」は敷地の境界を意味する用

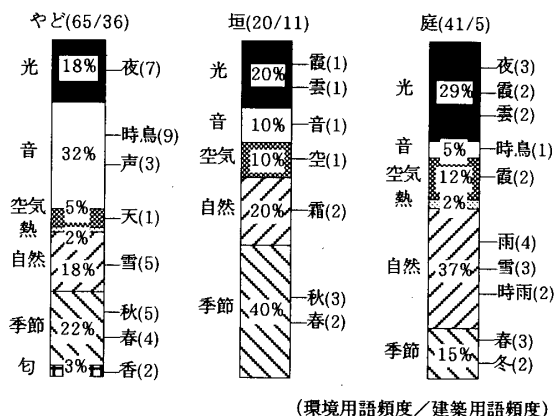


図3 『古今和歌集』における建築用語と環境用語の関連

語としてよりもむしろ自然界と物理的な建物との境界として読まれており、「垣」より内側に「時鳥」や「露」「霜」など自然界のものが入り込んでくるところに季節感を見いだしている。

「庭」には「自然」「光」「季節」に関わるものが多く、その中で「雨」「雪」「夜」「春」が多い。また恋愛情事からむ「床」において「夜」の頻度が飛び抜けて高いのも特徴的である。無常の意識に関わる「住む」という言葉は、動物の「音」と結びつき、「秋」の「季節」の中に侘び住まいにおける厭世の感情を表現している。

6-2. 「新古今和歌集」

図4に示すように、「新古今集」においてはどの建築用語にも「光」の比率が比較的高いが、その殆どは「月」「影」「夜」など月光に関するものである点が「万葉集」と大きく異なる。特に「やど」「いほ」「垣」「床」では光の比率が高い。「庭」では「光」同様「自然」の比率も高いが、用語の頻度では「風」が特に高い。

「やど」は「月」「夜」や「秋」と結びつき、恋愛感情表現の場となり、その周辺の自然現象を対象として寂寞とした情緒を表現している。たとえば「露」「時鳥」などを主題として自然の造化を愛でる情緒を表現している。

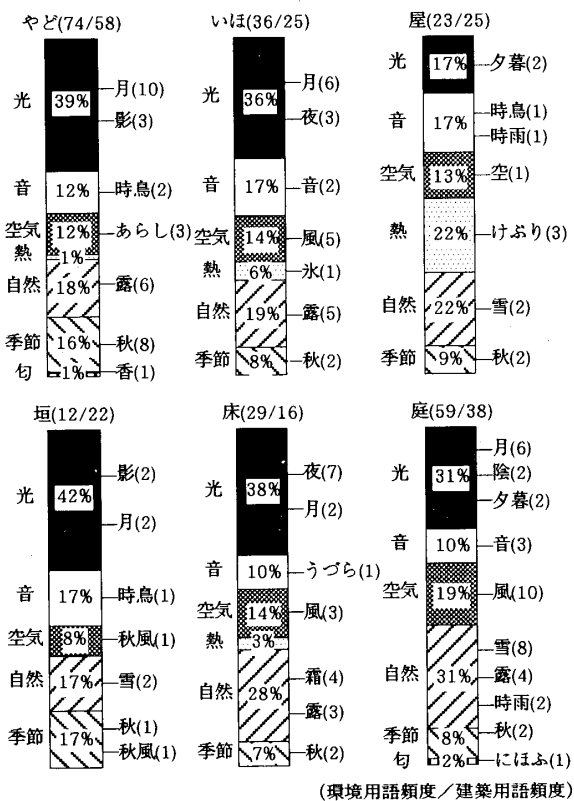


図4 「新古今和歌集」における建築用語と環境用語の関連

仮住まいの美学を表す「いほ」は、「光」に関するものが多く、中でも「月」「夜」がほとんどである。月光の中に、「いほ」は「風」「露」と共に自然を賛美しながら、ひとり住まいの寂しさ、無常、遁世といった感情を表現している。

「屋」の歌は、「雪」「秋」「夕暮」と共に、自然風景を詠むものが多いが、「雨」「けぶり」と結びつき、人に対する愛情を主題とした哀歌がよく見受けられる。

「垣」は「月」「影」「雪」と結びつき、自然を賛美する空間を意味している。「床」の登場する歌は恋愛に関するものが殆どであるが、登場する環境用語は「夜」「霜」「露」「風」など、冷たく寂しい印象を与えるものが目立つ。内容的にも実らぬ恋を悲しんだり、独り寂しく夜を過ごす想いを詠むものが多い。「庭」は、「風」「雪」「月」「露」と多く結びつき、「月」と結びつくとその美を表現するのに対し、「雪」「露」と結びつくと地面の空間として侘び住まいの寂しさ、女性の内心の愁いを表現する。

7. 建築と環境用語との関係からの比較

環境用語について、「万葉集」「新古今集」共に「光」が圧倒的に多く、「古今集」では「光」「音」「自然」「季節」の頻度が高い。「万葉集」においては建築用語では「家」「門」「宮」が、共に用いられる環境用語では「天」「日」の頻度が高く、建築の外から詠んでいるものが多い^{※9)}ため、そこに表れる環境も「日」「天」のようにスケールの大きなものが主流を占めていた。これに対し「古今集」では「やど」「垣」が「夜」「時鳥」「秋」「春」と共に、「新古今集」では「やど」「いほ」「垣」「庭」が「月」「雪」「露」「秋」などの身近な環境と共に詠まれており、建築内部から見える外部の環境を歌の要素としている。そこには大和を背景とした自然生活から平安京という都市生活への変化なども影響し、「万葉集」ではスケールの大きな、おらかな印象を与える環境用語が多かったのに対し、「古今集」「新古今集」では曖昧な、繊細な印象を与えるものが増えている。

「古今集」において、夜の光の「やど」の中に草花や季節などの自然の美を鑑賞する耽美の空間が見られ、「新古今集」においては、「月」の光は、「やど」「いほ」「庭」「住む」と結びつき、「仮住まいの美」から「侘び住まいの美」に変化していくことがうかがえる。

全体に建築用語が「万葉集」の「家」「宮」など家人・天皇に対するものから、「古今集」「新古今集」の「やど」「いほ」などの即物的な建築とその周辺の自然に対するものに移り変わっているのに伴い、環境用語においても「万葉集」の「天」という太陽の光から、「古今集」の「夜」「時鳥」「雪」という身近な環境、「新

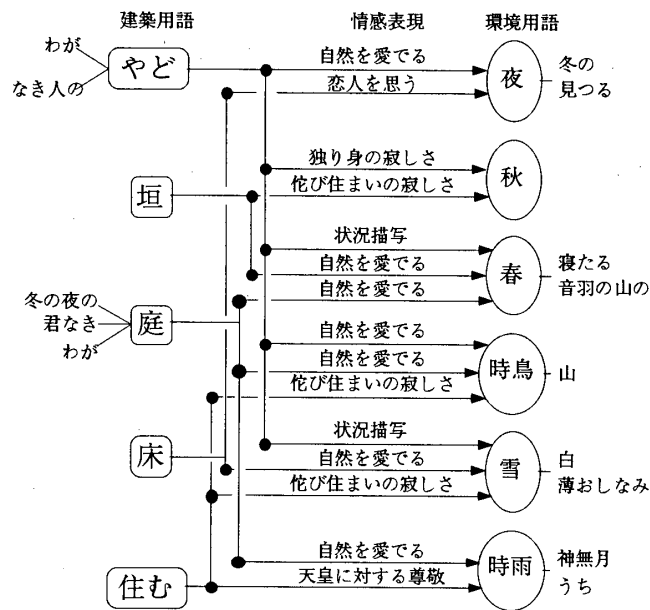


図5 「古今和歌集」における修飾用語との関連と情感

古今集』の「月」という月の光へ移行する傾向がある。

8. 修飾用語から見る建築とその環境の空間美意識

『古今集』『新古今集』における建築用語と環境用語がそれぞれの修飾用語との関連及びその情感表現を図5、図6に示す。『万葉集』では、建築用語と環境用語と修飾用語の特定の組み合わせがあり、それによって特定の建築空間を表現する傾向があることから、修飾用語の種類は少なく、次のような表現が特徴的である。

「家」「宮」「門」(建築用語) ← 「日」「天」(環境用語)
← 「高知るや」「高照らす」(環境用語に係る修飾用語)

『古今集』『新古今集』においては、建築用語に対する修飾用語は種類が少ないものの、環境用語に対するものは多く表現も多彩なことは、建築のまわりの環境に微妙な感覚が発達したことを示している。特に「風」「月」「露」等身近な環境や繊細な環境に対する修飾用語が多く、それらへの関心の高さを伺わせる。環境用語に対する修飾用語は次のように見られる。

「月」←有明の、庭の、山の端の、あまてる、しぐるる、ねやの、軒もる等

「風」←庭の、とこの、浦の、家の、秋の、宿の、竹の葉ささむ、谷の等

『古今集』には自然を愛でる情感表現が多く、『新古今集』には哀れの情感が建築と環境を結びつけるものとして多く現れる。

9. 文脈と情感表現から見る建築とその環境の空間美意識

建築用語を含む歌を作者、作成された状況及び文脈内容によって分類したものを図7に示す。『古今集』『新古今集』とも作者別による文脈内容や情感表現の相違は特にみられなかった。作成された状況で分類すると、共に以下のように大別される。

9-1. 公的な表現の歌

公的な表現の歌は政(まつりごと)の場や行事(歌合)等で読まれたもので、政に関係する歌と歌合で詠まれた歌に分けられる。前者は挨拶文の役割を果たしており、長歌を為しているものが多い。

...とのへ守る実の 御垣守 をさをさしくも
おもほえず 九の重ねの なかにては あらしのか
ぜも 聞かざりき いまは野山し ちかければ 春
はかすみに たなびかれ 夏はうつせみ 鳴き暮ら
し 秋はしぐれに 袖をかし 冬は霜にぞ 責めら
るる かかるわびしき... (文1、1003)

の例は、『古今集』撰定の拜命を受けた喜びと決意を読んでいる。拜命を受ける以前、作者は

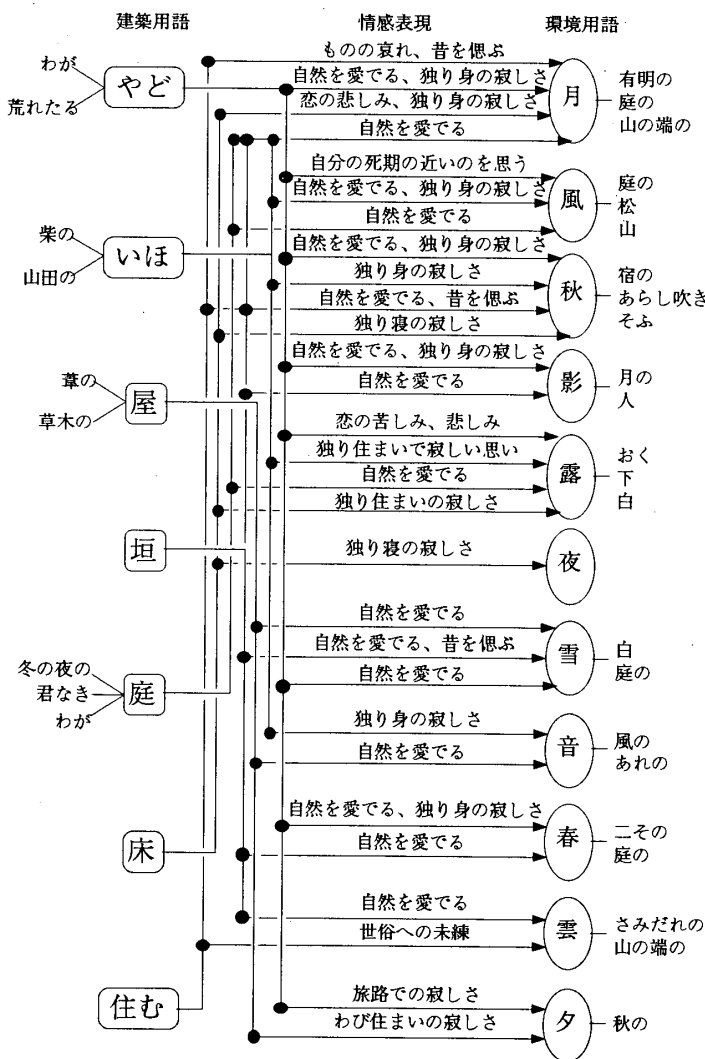


図6 「新古今和歌集」における修飾用語との関連と情感

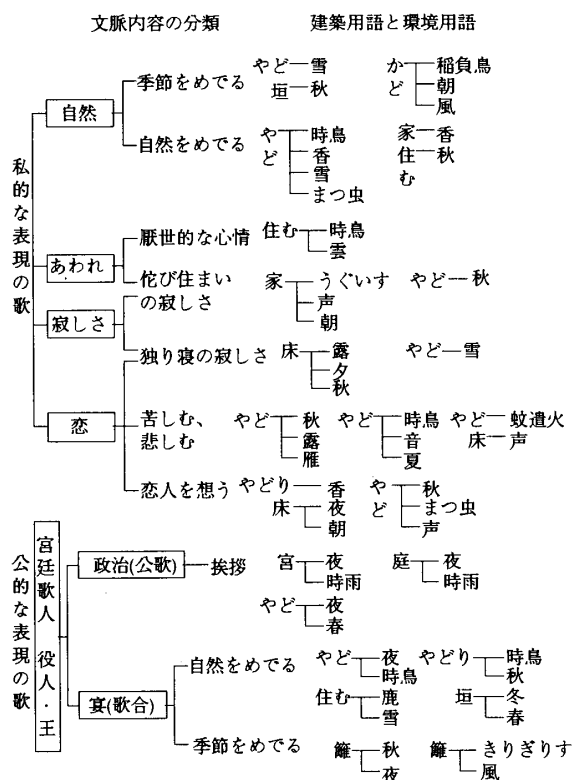


図7 『古今集』『新古今集』の文脈による情感表現分類

御垣守などの外の任務に就いていたが、それが長く辛いものであったことを「あらし」「かぜ」「冬」「霜」が表現している。

一方「歌合」は自然を愛でるものと季節を愛でるものに分類される。「自然を愛でる」では「やど」「夜」「時鳥」「秋」「冬」「春」「鹿」「雪」と共に登場し、「季節を愛でる」では「籬」と「秋」「夜」「きりぎりす」「風」が登場する。また、環境用語そのものの意味が文脈には反映されない例も増えている。

萬世をふるにかひあるやどなれや みゆきとみえて花ぞ散りける (文3、1452)

に見られるように、散る花を深雪に見立て、そこから「行幸」を連想して藤原氏の繁栄をことほいでいる。そこには環境としての「雪」は現れない。『古今集』『新古今集』にはこのような歌が多く、人々の関心が自然に即しながらも政治、経済、文化に及んでいる様子が伺える。

公的な表現の歌に現れる建築用語に「宮」「やど」「庭」があるが、直接宮殿の意として用いられているものはなく、この点は万葉集と大きく異なる点である。共に用いられる環境用語も自然そのものが語られることはなく、象徴性を利用して氏族の反映を祈る心や喜びの心を表現している。「時鳥」「夜」「春」の頻度が高い。

9.2 私的な表現

私的な表現の歌は家や旅先など私的な場面で読まれた

ものである。『万葉集』が旅先や防人、赴任の場から家族のことを思っていたのに対し、『古今集』『新古今集』の私的な表現の歌の舞台となっているのは、主に家とその周辺である。抽出された環境用語が身近な環境を表すものが多いことから、家の中から外を見やっている場合が多いことが分かる。「やど」には様々な環境用語がつくが、いずれも「あはれ」「寂しさ」「恋」と侘びしさを漂わせている。自然を愛でるものでも「やど」と「時鳥」の組み合わせに見られるように「仮住まい」の耽美的な空間を環境用語が一層引き立たせている。

古今、新古今の時代になって、和歌の空間情緒は私的な花鳥風月の空間に埋没したといえる。その私的な空間情緒を表すのは「あはれ」「寂しさ」「恋」を主題とした歌であり、全体的に自然を詠むのは少なくなり、忍ぶ恋や無常を詠むものが多くなっている。

10. 結論

(1) 『古今集』『新古今集』において、[光][自然][音]に関する用語「月」「夜」「露」「雨」「雪」「時鳥」「音」が建築用語と共に多く用いられていることは、古今から新古今の人々の空間情緒が直射光や日光に関するものから、間接光や月光に関するものへと変化したと同時に、花鳥風月の美を觀賞する耽美的空間へと移行していく傾向を示している。『万葉集』の「天」「日」-「家」「門」「宮」という家族・国家につながる人間関係の空間が消失し、「月」「夜」-「やど」「いほ」という草花・耽美につながる情緒空間が浮かび上がってきている。

(2) 環境用語の持つ物理的要素、或いはその象徴性は建築用語と結びついてある特定の情感表現を表している。「古今集』『新古今集』によく登場した「やど」「住む」は「雪」「秋」「時鳥」と共に風物を愛でる情緒、「月」「夜」「風」「露」と共に恋愛の苦しみ哀しみを表現し、『新古今集』では更に「いほ」は「月」「風」「露」と共に、「庭」「軒」は「月」「雨」「雪」と共に遁世の心情を表し、侘び住まいの美学を表現している。『古今集』の建築空間情緒は「夜」「秋」などと結びついて単純化し、『新古今集』では「月」「秋」「露」「風」「雪」「音」などと結びついて多様化する傾向を示している。

(3) 『古今集』『新古今集』とも建築空間として「やど」が圧倒的に多く、「声」「時鳥」を伴って自然を愛でる情緒を表現し、「月」「秋」「風」「夜」を伴って恋人を偲ぶ情緒の舞台となる。『新古今和歌集』では「いほ」が増え、「月」「風」「露」とともに遁世の心情を表し、侘び住まいの美学の舞台となる。また「住む」という派生語は「月」「夜」「秋」「雨」につながり、遁世の心情を表し侘び住まいの美学と結びついてい

る。

(4) 庭を含む身近な空間の充実が見られる『古今集』『新古今集』では、「庭」「軒」は「月」「雨」「雪」と共に遁世の心情を表し、「床」は「月」「霜」「夜」「露」と共に女性の繊細な恋情を表現している。

(5) 「やど」「垣」において「時鳥」「秋」「雪」によって自然風物を愛でるといような空間表現が多いことから、『古今集』での「花鳥風月」の世界観の確立がうかがえる。『新古今集』には、「恋」を主題とした歌が最も多いが、それは「月」「夜」「秋」「風」などによって「やど」「住む」「床」における女性の孤独や忍ぶ恋を詠むような歌がほとんどであり、自然の造化、形象に自らの愁い感情を託した「もののあはれ」の美学が成立するといえる。

(6) 古典和歌の空間情緒は、四季に応じて移り変わる自然の風物に自らの感情を託すもので、『万葉集』『天』『日』の直情から、『古今集』の「時鳥」「秋」「雪」「夜」にかかわる「花鳥風月」の耽美、『新古今集』の「月」「秋」「風」にかかわる「もののあはれ」の無常観へ転換していく日本の美意識の変遷が読みとれる。

・注・

- 1) 参考文献8～12を参照。
- 2) 『古今集』『新古今集』の中に登場する建築用語に関しては、参考文献9を参照。
- 3) 既往研究については、既発表論文(参考文献8～12)に述べている。
- 4) 『記・紀・万葉』の中の建築用語の研究があり、木村徳国氏による「記・紀・万葉世界における建築の研究」に属するもので、日本建築学会論文報告集において、「七・八世紀におけるタカドノ・タカヤの建築的イメージ」(No.242, 1976.4)、「七・八世紀におけるイホ・カリホ・イホリ」(No.248, 1976.10)が発表されている。
- 5) 池浩三氏が寝殿造建築の史実との対応関係を研究し、『源氏物語—その住まいの世界』(中央公論美術出版)に詳しい。
- 6) 小野恭平氏が古代から中世にかけての居住空間の文化的側面に関する研究は、日本建築学会論文報告集において、「中古の文学作品からみた山里の基本的イメージとその美について」(No.393, 1988.11)、「中古の文学作品からみた山里の興味について」(No.404, 1989.10)、「中世初期の仏教説話にみる仏道修行者の庵」(No.436, 1992.6)が発表されている。
- 7) 中小路駿逸氏による『日本文学の構図—和歌と海と宮殿と』(桜楓社)が発表されている。
- 8) 環境用語のうち、複数の要素に関わるものに関しては、歌の内容によってそれぞれの要素に抽出した。従って、同一の用語でも、分類により頻度の異なるものがある。例えば、「天」「空」は[光・空気]、「霧」は[自然・空気]、「霞」は[光・空気・自然]、「雷」は[光・自然・音]、「あらし」は[自然・空気・音]、「火」は[光・熱]それぞれに分類されている。

9) 参考文献8と12を参照。

・参考文献・

- 1) 奥村恒哉 校注：新潮日本古典集成・『古今和歌集』、新潮社、1978.7.10
- 2) 佐伯梅友 校注：日本古典文学大系8・『古今和歌集』、岩波書店、1958.3.5
- 3) 久保田淳 校注：新潮日本古典集成・『新古今和歌集』、全2巻、新潮社、1979.3.10
- 4) 久松潜一 校注：日本古典文学大系28・『新古今和歌集』、岩波書店、1958.2.5
- 5) 青木生子ほか4名 校注：新潮日本古典集成・『万葉集』、全5巻、新潮社、1984.9.10
- 6) 高木市之助ほか3名 校注：日本古典文学大系4・『万葉集』、全4巻、岩波書店、1957.5.6
- 7) 土屋文明：『万葉集私注』、全10巻、筑摩書店、1976.3
- 8) 若山滋ほか1名：『万葉集』における建築空間、日本建築学会計画系論報告集、No.388、pp.116-123、1988.6
- 9) 若山滋ほか1名：『古今和歌集』と『新古今和歌集』における建築空間、日本建築学会計画系論文報告集、No.405、pp.141-147、1989.11
- 10) 若山滋：『源氏物語』における建築空間、日本建築学会計画系論文報告集、No.408、pp.93-99、1990.2
- 11) 若山滋：『枕草子』における建築空間、日本建築学会計画系論文報告集、No.411、pp.89-95、1990.5
- 12) 張突文ほか2名：『万葉集』に現れる建築と環境の関係に関する研究、日本建築学会計画系論文集、No.471、pp.93-98、1995.5
- 13) 若山滋：文学の中の都市と建築、丸善ライブラリー、1991.4.20
- 14) 若山滋：「家」と「やど」・建築からの文化論、朝日新聞社、1995.5.5
- 15) 木村徳国：上代語にもとづく日本建築史の研究、中央公論美術出版、1988.2.25
- 16) 伊藤正雄、足立巻一：要説日本文学史、社会思想社、1977.8.30
- 17) 会田雄次：日本の風土と文化、角川書店、1972.2.10
- 18) G.B.サンソム：日本文化史、東京創元社、1976.11.30
- 19) H.P.ヴァルレイ：日本文化小史、篠崎書林、1985.6.1
- 20) 佐々木高明ほか1名：日本文化の源流、小学館、1991.4.20
- 21) 今井優：古今風の起源と本質、利泉書院、1986.8.20
- 22) 石川常彦：新古今の世界、和泉書院、1986.6.15
- 23) 後藤重郎：新古今和歌集の基礎的研究、塙書房、1968.3.26
- 24) 神野志隆光ほか9名：和歌史—万葉から現代短歌まで—、和泉書院、1985.4.30
- 25) 太田義恵：日本詩歌の象徴精神・古代編、羽田書店、1950.3.20

(1996年4月10日原稿受理、1996年8月2日採用決定)